放課後の遊びと
生活の場(学童保育)

こどもルームの運営

こどもルームは、小学校に在籍し、放課後帰宅しても保護者が仕事や病気で保育が受けられない児童に、遊びと生活の場を提供して健全な育成と家庭の支援を図ることを目的としています。今回は、市内に37カ所ある、こどもルームの運営について費用の面から紹介します。

問 こどもルーム担当室
☎7167－1294

こどもルームの概要

入所できる児童は、原則として市立小学校の1～3年生（障害児については6年生まで）で、保護者が労働や病気などで保育ができない場合です。児童福祉法には、放課後に適切な遊び、生活の場を与えてその健全な育成を図る事業と規定されています。

過去に父母会組織による民営の施設がありましたが、事業の必要性、安定性、同一のサービスの提供を目的に公設公営化しました。

■事業の概要

事業主体	市（すべて公設公営）
開所日	平日の放課後、土曜日、夏休みや冬休みなどの学校休業日
設置場所	41小学校区のうち37カ所（小学校敷地内35カ所、公共施設内2カ所）
保育料	10,000円（おやつ代含む）、減免制度あり

こどもルームの生活の流れ（平日）

●午後2時～3時ごろ
ただいま！ おかえりなさい！（下校）
▼
遊び（行事の準備なども）
宿題（子どもが自主的に行う）
おやつ
▼
片付け・掃除など
●午後6時～7時ごろ
さようなら！（帰宅）

運営費と保育料

子どもたちを保育する指導員・相談員の人件費、おやつなどの食料費のほか、光熱費・施設修繕費・通信費などの費用がかかります。その費用は、保護者からの保育料のほか、税金からの負担で賄っています。

在籍児童数
1,875人
（小学1～3年生の約20パーセント）

こどもルームの運営にかかる費用

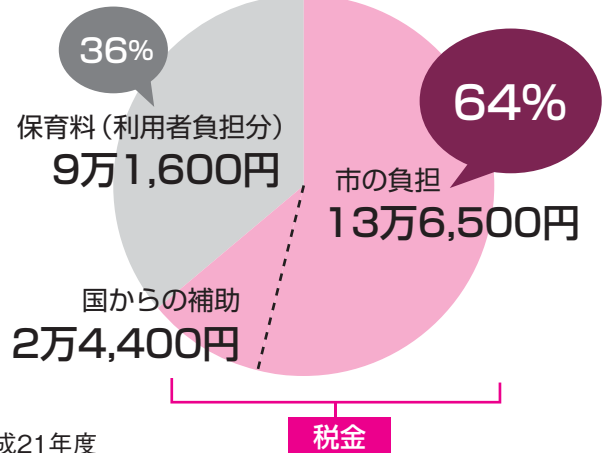
市内37ルーム全体で…

合計 4億7,354万円

項目	金額
保育職員人件費	3億8,366万円（81％）
おやつ代	3,485万円（7％）
事務職員人件費	2,805万円（6％）
その他	2,698万円（6％）

在籍児童1人当たりでは…

25万2,500円

項目	金額	割合
保育料（利用者負担分）	9万1,600円	36％
市の負担	13万6,500円	64％（税金）
国からの補助	2万4,400円	（税金）

※数字はいずれも平成21年度

こどもルームを増やすには

定員数を増やすためには、こどもルームの新たな建設が必要になります。最近の実績から試算すると、次のような費用がかかります。また、毎年の運営費も、増えた児童分だけ必要となります。

1カ所建てるのにいくらかかるのか

・木造平屋建て
・延床面積140平方メートル
・児童定員50人
　の施設を小学校の敷地内に建てるには

➡ 約3,700万円
設計料200万円
建設費3,400万円
備品代100万円

児童1人当たりでいくらかかるのか

児童1人当たりの施設初期費用は（耐用年数22年間で試算）

➡ 小学1～3年生まで利用すると、約10万円

増加するニーズと利用者負担

柏市長　秋山　浩保

長時間働く親が増加しており、「子どもを預かる」ことを目的とした、こどもルームに対するニーズは大きく、また時間や内容についても、さまざまな声が届きます。核家族化が進む中で、長時間働く親の子育てを支援することは、「社会の仕事」であるという理解が広がっています。

現状では、利用者の負担は平均で36パーセントとなっており、残りは税によるものです。こどもルームを利用する親からは「もっと利用料が安くならないか」「他の市はもっと安いのに、柏が高いのはどうしてか」という意見もあります。

一方で、利用者の事情によって利用している行政サービスであるから、（負担力のある）利用者はもう少し負担してもよいのではないかという意見もあります。

どれくらいを行政が負担し、利用者が負担すべきなのか。行政サービスによって考え方が異なりますが、それを議論することも市民参加型市政の第一歩です。

視覚に障害のあるかたを支援する
柏市点字サークル「いなほ会」と柏市朗読奉仕サークル

市内には視覚に障害のあるかたが約700人います。柏市点字サークル「いなほ会」と柏市朗読奉仕サークルは、そのかたがたに対し、市政をはじめとする多様な情報を提供するなど、福祉の向上を図るために活動するボランティア団体です。行政だけでは行き届かない細かい部分に対応するなど、市と連携しながら活動しています。

問障害福祉課 ☎7167－1136

●柏市点字サークル「いなほ会」

点字技術を持った会員が「広報かしわ」等をパソコンで点訳し、点字版の冊子を作成しています。読みやすい点訳を心掛け、技術向上にも力を入れています。現在47人が活動中です。

●柏市朗読奉仕サークル

「広報かしわ」等の情報を音声で吹き込み、テープ図書を作成しています。新規会員の技術向上にも力を入れ、研修をこまめに行っています。現在96人が活動中です。

特徴的な活動を紹介

柏市点字サークル「いなほ会」 点訳ボランティア

「広報かしわ」や視覚障害者協会から依頼される各種資料等、個人から依頼される取扱説明書等を点訳しています。

その他にも、福祉教育の一環として、地域の小・中学校へ出向いたり、ボランティア体験教室で小学生向けに点字教室を行ったりしています。教室では、点字の読み書きや練習器を使って点字を作成するなど、直接点字と触れ合う機会を設けています。また、点訳奉仕員養成講座では、視覚に障害のある講師の補佐役として、話す内容等を黒板に代筆するなどしています。

柏市朗読奉仕サークル 音訳ボランティア

「広報かしわ」や、利用者からの依頼図書、その他利用者とサークルを結ぶ独自のテープ「せせらぎ」等、さまざまな分野の音訳を手掛けています。また、対面朗読も行っています。

読み方については、朗読奉仕員指導者として経験を積んだ講師による研修を毎年受け、聞きやすい音訳ができるよう心掛けています。年に1度、視覚に障害のあるかたたちと交流会を持ち、サークル活動に生かせるよう学んでいます。現在は、テープからＣＤへの変更も視野に入れ、利用者のニーズに応えられるよう、サークル一丸となって取り組んでいます。

支える ふれあう つなげる わたしのボランティア活動 役に立てること

点訳奉仕活動で一隅に光を

大坪（おおつぼ） 修（おさむ）

私が点字を始めたきっかけは、今から六年前の7月1日、「広報かしわ」で点訳奉仕員養成講座の記事を見たことでした。定年退職後、年金や医療で現役世代のお世話になっていることもあり、少しでも社会の役に立てればと思って早速申し込みました。

十回の講座の後「いなほ会」に入会、さらに勉強会を九カ月続け、点訳仲間に入れてもらいました。点字は思ったより奥が深く、分からない場面が何回も出てきましたが、この会の先輩のかたがたは親切で、丁寧に指導してくれました。

点字はエレベーターの脇などに表示されているのでご存じかと思いますが、小さな縦の長方形の六カ所の点を、その数と位置により凸点で表示する一種の仮名文字です。

「いなほ会」での仕事は、タイプ点字から始まりました。タイプ点字は視覚障害者協会から依頼の会報「みのり」の点訳などで利用しています。点字用紙に点字タイプライターで打つと凹点の形になります。タイプ点字は間違えたら用紙を取り替えてやり直しになります。慣れるまでは苦労もありますが、自分から始めたことですし、点字に習熟するための修業と思って頑張っています。

次に広報の点訳の班に入りました。「広報かしわ」の点訳は量が多いので、タイプ点字では間に合わずパソコン点字でやります。パソコン点字の長所は、間違いが直しやすい、分担して点訳ができるなどで、とても便利です。それでも一回分の広報を点訳し、点字印刷するのに連続四日間かかります。点字広報は評判がいいのでやりがいがあります。

当然のことですが、点字には限界があります。印刷物では字の色や形、大きさなどを変えられますが、点字ではできません。図やグラフなども描けません。このため、少しでも分かりやすい形で情報として提供できるよう、毎週の例会で研修し工夫を重ねています。

これからは点訳作業を楽しみたいと思っています。志のあるかた、一緒に活動してみませんか。

音訳奉仕の昨日・今日・明日

鈴木（すずき） 良弘（よしひろ）

日々の活動に迷いがないわけではない。音訳ボランティアが自分たちの生きがいになり得るだろうか？ この奉仕活動が善意として相手に通じ、素直に評価されていくのだろうか？

応募のきっかけは女房。散歩はしない、町内に知人はいない、図書館通いは三日でやめた。手帳の予定は毎週日曜の男声合唱のみ。試しに洗濯物の出し入れを手伝ったら、庭伝いの裏の家から当時八十五歳の義母の声がかかった。N子はいないのですか。会社はお休みですか。今日はゴルフに行かないのですか。ムコ殿でもあるまいし、冗談じゃない。何をしようと勝手のはずだ、ほっといてくれの心境だった。責任を感じた妻が、「広報かしわ」の紙面からサークル会員募集を見つけだした。

漢字の読みと小論説の録音試験あり。半年間の新人研修は、アナウンサーの養成講座ばりの刺激に満ちたものだった。滑舌訓練、読み方指導。これまで身に付いたアクセントはそう簡単には直らない。

月二回の「広報かしわ」のテープ作成、依頼された本の音読テープ、直接対面して希望図書を朗読するなど、数えてみると準備室の利用はそれぞれ入れ替わりで月に十八日以上に及ぶ。

一緒の仲間はそろって声美人である。声だけ？ イエイエ、もちろん容姿も品格もスタイルも…それなりに。ただ酒量でかなわない人が何人もいるのは楽しい驚きだった。

音訳の世界も変革時代を迎えている。現在使用中のデッキが新規製造中止になり、テープの不良品も増加するなど、作業環境が厳しくなった。テープからＣＤへ急速に切り替わりつつある。日本点字図書館も全面的にデジタル方式である。われわれも準備委員会を立ち上げ、計画に沿って会員相互の啓発、必要機器の設置など総意を挙げて取り組んでいる。

視覚障害者協会のかたがた、障害福祉課はじめ市の関係者各位とのすり合わせ等、問題山積だが、三十一年間のサークルの歴史は、きっと躊躇（ちゅうちょ）するわれわれを後押ししてくれるだろう。